

棟方志功と新潟

— 昭和六年の旅を中心に —

小林 一吉

一

棟方志功（明治三十六〜昭和五十（一九〇三〜一九七五））は、昭和三十一年（一九五六）年、ヴェネツィア・ビエンナーレの版画部門で日本人初となる国際版画大賞を受賞し、昭和四十五（一九七〇）年、文化勲章を受章するなど、日本を代表する世界的な板（版）画家である。新潟との縁も深く、まだ無名時代から島丈夫ら新潟県出身者から手厚い支援を受け、有名作家になった後も新潟県内をたびたび訪れるなどして、新潟の風景・風物を題材とした作品を数多く残している。

棟方が板（版）画家として立つ契機となった作品は昭和七（一九三二）年の第七回国画会展に出品し国画会奨学賞を受賞した《亀田、長谷川邸の裏庭》ほか三点である。その後の柳宗悦ら民藝関係者との出会いによって棟方の才能が一気に開花したと一般的には考えられがちであるため、棟方の初期の創作行為に関わっていた「新潟」は今日忘れられつつあるように思われる。本論では、郷土史的資料なども丹念に調べることによって、忘れられた存在となりつつある棟方の初期の支援者であった新潟県人、すなわち島丈夫（味方村）、田下三作（加茂町）、長谷川松郎（亀田町）といった人々にあらためて光を当てつつ、彼らとの交流の中で棟方が新潟に残した作品についても観てみたい。

棟方志功と新潟ということでは、書家で歌人・東洋美術史家の會津八一（新潟市出身）との交流が戦後まもなく本格的に始まるが、八一との関係については會津八一記念館（新潟市中央区）による先行研究『會津八一と棟方志功―ほとばしる個性―』がある〔註1〕。また、新潟県内で棟方志功の優品を多数収蔵している美術館として雪梁舎美術館（新潟市西區）を挙げることができる〔註2〕。これらの館が発行する文献からは、戦前・戦中・戦後を通して新潟ゆかりの棟方作品が存在することが分かるし、各地の郷土史関連文献にも時折、棟方の小品が掲載されていることがある。

新潟ゆかりの棟方作品のうち、最後の作品は、最晩年の《羽海道棟方板画》全十三冊（昭和四十九（一九七四）年）のうちの《開表 新潟 信濃川分水の柵》と《七月 新潟 荒海の柵》であるが、「信濃川分水」（大河津分水）へは、棟方は昭和六（一九三一）年の最初の新潟旅行中に島丈夫らとすでに訪れていたという説もある。

私たちが考える以上に、昭和六年の新潟への旅は、その後の棟方にとつて大きな意味を持っているように思われる。棟方が好んで詠み、板画など

にもした自作の短歌「小矢部川 雪解け居るも 吾妹子の 矢羽根むらさき 袂香ふも」も、当時疎開していた富山県福光を流れる小矢部川の風景を詠んだものであるという説もある。この短歌は棟方の福光時代の支援者・石崎俊彦（大正元〜平成十五（一九一〜二〇〇三））宛てに、棟方が新潟から富山経由で福光に帰る旅先から「福光に似た風景に出会い、こんな歌を作ったよ、と自慢げに六首も」送ってきた歌で、「その歌を上記の歌（小矢部川の歌）に校正し、作品にした」ものであるという〔註3〕。石崎俊彦は福光の町立図書館の館員（のち館長）で、昭和二十一年十二月に棟方が福光町内に新居を構えた際、その土地を用意し、自分も棟方家の隣に家を建てて住み、棟方一家を献身的に支えた人物である。多数の棟方作品や民藝品を所有し、それらのコレクションは現在の「棟方志功記念館 愛染苑」を形成する礎となった（同館パンフレット等による）。

棟方志功に縁のある新潟県人では、前述の會津八一のほかに、著名人に限ってみても曾我量深、式場隆三郎などがある。以上のようなことから、棟方志功は新潟ゆかりの作家の一人として捉えることができると思われる。

二

昭和六（一九三一）年十一月、まだ無名時代の棟方志功は、新潟県出身の薬剤師で棟方の初期の支援者である島丈夫（明治三十〜昭和五十二（一八九七〜一九七七））とその妻ヤイに同行して、新潟県内各地を訪れている。この旅は、本来の目的は島丈夫が父の法要のために帰省するものであったが、夫妻に同行した棟方にとっては、これが最初の新潟への旅となった。

昭和六年は新潟にとつても画期的な年であった。同年六月には「信濃川大河津分水路補修工事」が完成し（棟方最晩年の作品《羽海道棟方板画》の《開表 新潟 信濃川分水の柵》は、「信濃川大河津分水路補修工事竣工記念碑」の碑文を題材にしている）、また九月には、のちに川端康成が『雪国』（昭和十二年）の中で「国境の長いトンネル」と形容し人口に膾炙することになった上越線の「清水トンネル」が開通している。

棟方が東京から島夫妻に伴われて新潟へ旅したのは十一月のことであるから、島夫妻と棟方も、開通もないこのトンネルを汽車で通ったものと

思われる。清水トネルの完成により、新潟―東京（上野）間は、それまでの長野（信越線）経由での所要約十一時間から所要約七時間に短縮され、新潟と東京は飛躍的に「近く」なったとされた。しかしこれ以降、皮肉にも新潟の「裏日本」化が進むこととなったとされている〔註4〕。

昭和六年の新潟で完成した「二大」土木工事、すなわち「清水トネル」の完成と「大津分水」の補修工事の完成という二つの大きな出来事は、文学作品の風景描写にも影響を与え、後者は棟方作品（美術）にも素材を提供している。ちなみに、新潟市のシンボル「萬代橋」が現在の橋に架け替えられたのは昭和四年のことである（平成十六年、国指定重要文化財）。その「三代目」萬代橋竣工の二年後に、「清水トネル」が完成し、上越線全通によって東京（上野）―新潟間が「最短距離」で繋がったのである。そしてその先に、坂口安吾も言及していたように、新開地（フロンティア）としての「大陸」があった。

この新潟への旅の副産物として、棟方が板（版）画家として立つ契機となった四作品すなわち《越後、加茂にての庭》〔図版1、リスト3〕、《亀田、長谷川邸の内園》〔図版2、リスト4〕、《亀田、長谷川邸の裏庭》〔図版3、リスト5〕、《合浦、青森の公園》のうちの、《合浦、青森の公園》を除く三点の下絵が描かれた。四作品は昭和七（一九三二）年五月の第七回国画会展に出品され、《亀田、長谷川邸の裏庭》で棟方は国画奨学賞を受賞している。さらに《越後、加茂にての庭》、《亀田、長谷川邸の内園》、《亀田、長谷川邸の裏庭》の三作品が米国ボストン美術館に買い上げられ、《合浦、青森の公園》はパリ・リュクサンブール美術館に買い上げられることとなった（なお、各作品の素材・技法、寸法、所蔵者、図版掲載〔出典〕等の情報は、本論末尾の「棟方志功 新潟関係作品リスト」を参照されたい）。

《越後、加茂にての庭》は、島丈夫の妻ヤイの実家がある加茂町の寺院の庭を描いたものである。また、《亀田、長谷川邸の内園》は国画会展では《亀田、長谷川邸の裏庭》と同じ題名で出品されたものである（東京国立近代美術館『棟方志功展』朝日新聞社 昭和六十年、二六頁による）。なお、長谷川邸の庭を描いた二作品のうち現在、棟方志功記念館所蔵のものは、はじめ棟方本人から亀田・長谷川家に贈られたものであったが、昭和五十年の棟方板画美術館（鎌倉、現在は閉館）の開館に際し、当時の長谷川家当主・軍治氏が同館の求めに応じて寄贈したものであるという。軍治氏は「タダで〔棟方志功から〕貰ったものを無料で返しただけのこと」と語っていたという〔註5〕。

棟方は後年、昭和七年の国画会展のときのことを次のように書いている。

国画会に、はじめて四点出品したのは、昭和五年のことです。昭和七年には、前記の島丈夫氏のつながりから知りました、新潟の亀田町の長谷川松郎氏の庭園を板画にした『長谷川邸の庭』を初め五点ほどを作りました。わたくしは上野まで、中野の沼袋から、これを背負って歩いて行きました。そして上野の不忍の弁天様に作品の幸いを祈りました。この時は全部五点とも入選し、『長谷川邸の庭』は国画奨学賞を受けました。弁天様が、ソロソロわたくしに近づいてくださいました。（『板極道』〔註6〕）

棟方の孫で棟方作品に詳しい石井頼子氏は「版画で賞を得、海外にも受け入れられたということは大きな自信となり、これを期に棟方は版画家として立つ決意を固めたという」と述べている〔註7〕。昭和六年の新潟への旅は、棟方にとって人生の転機となる創作上の素材を提供したと言えるだろう。この旅での主な訪問先は、まず島家の菩提寺である西蒲原郡味方村（現・新潟市南区）の高念寺、島の妻ヤイの実家・田下家のある南蒲原郡加茂町（現・加茂市）、妻ヤイの父〔註8〕・田下三作（明治四〇昭和二一（一八七〇―一九四六）の義理の娘ツヤの実家・長谷川家のある中蒲原郡亀田町（現・新潟市江南区）などであり、この他、北蒲原郡安田村（現・阿賀野市）の孝順寺なども訪れている〔註9〕。

島丈夫については、棟方は次のように書いている。

現在、そのころと同じく仲よしがつづいている方ですが、この下宿の知人で、島丈夫氏という人がおります。この方は新潟の出身で、薬剤師さんで、今は株式会社島商店の社長で何十人も人を使っている方ですが、そのころは自転車のように荷物をつけて配達してあるいた方でした。この方が、絵が好きだという理由ではなくて、遠い自分と同じ雪国から来て勉強しているのはさびしいことだろうと思ったのでしょうか、また、新潟県の方の気性で、力を合わせて仕事を立てようとする心からの応援をしようと思ったのでしよう、絵の具代や、電車賃があるときは出してやるというのでした。わたくしは電車賃に困ったり、大きい絵を描きたくなると、島氏の厄介になりました。この方はわたくしの駆け出し時代から今もなおいちはん永いつきあいをしています。

島氏はそのころ、奥様をもらったばかりでした。同じ新潟県の加茂市

の田下家から来た方でした。——奥様は、大きな丸鬘まるまげに結って、赤いカノコの手柄てがらをしていました。そうしてタスキをかけて、いつも忠実まめまめしく働いていました。顔もこころも新潟の女の方の美しさをしています。今は孫さんがあって、時々わたくしの家へ元氣に来てくれます。
〔板極道〕〔註10〕

大正十三（一九二四）年、画家として立つことを決意した棟方は、青森地方裁判所の弁護士控所給仕を辞し、九月七日、青森駅発の夜行列車で上京する。棟方二十一才のときのことである。伯母ヨネの知り合いである本郷区弓町の渡辺勝兵衛方に下宿。島丈夫との出会いはこの頃のこと、以後支援を受けることになる。なお、島と知り合った年については翌年の大正十四（一九二五）年という説もあるが〔註11〕、いずれにせよ、第五回帝展（大正十三（一九二四）年十月）に初出品して落選した油彩画《合浦池畔》を島が買い取ってくれたという逸話はよく知られている〔註12〕。

新潟の郷土史的研究によれば、島の実家は「越後味方村の地主」〔註13〕である。今回この論文を執筆するにあたって、筆者は新潟市南区（旧・味方村）吉江の高念寺をお訪ねした〔註14〕。その日は島家のお墓だけでも探し当てようという算段であったが、ちょうど御堂の方から墓地の方に出てこられたご住職と偶然お会いすることが出来、ご住職がこれから法事に出席せられるところというところで短い時間ではあったが、いろいろと貴重なお話を伺うことが出来たことは誠に幸いであった。まず、島家の墓は、以前は島家の敷地内であったが、親族が全員この地を離れたので、その敷地内に墓は今はないということ。それゆえ、この寺の墓地にも島家の墓はないが、本堂の前に大きな石碑が建っていて、その石碑の下が共同墓地になっており、島丈夫氏も今はその石碑の下に眠っているということ等である。また、同寺本堂の扁額「高念寺」は「句佛上人」こと大谷光演（真宗本廟 東本願寺、第二十三代法主「彰如」上人）（明治八〇昭和十八）の筆によるものとのことであった。

旧・味方村は浄土真宗（とくに真宗大谷派）が盛んな土地で〔註15〕、曾我量深（明治八〇昭和四十六（一八七五）一九七二）もこの地の生まれである。言うまでもなく、曾我量深は真宗大谷派の碩学で、大谷大学長もつとめた仏教学者であるが、棟方志功も後年、曾我の法語に感銘を受けて、曾我の法語による書を自らしたためている〔註16〕。

島家の菩提寺であった高念寺もまた真宗大谷派であるが、このことは棟方にとって重要な意味を持っているように思われる。なぜなら、後に棟方

が柳宗悦（明治二十二〇昭和三十六（一八八九）一九六一）ら民藝運動の関係者たちによって開眼することになったと一般的に言われている浄土教（阿弥陀信仰）の世界観に、僅かながらでも、このときすでに島丈夫を通して触れていたと思われるからである。この旅行中にも棟方は同じく島夫妻とともに北蒲原郡安田村（現・阿賀野市）の孝順寺にも参っている。孝順寺もまた真宗大谷派の寺院であるが、親鸞聖人の「越後七不思議」のひとつ「保田の三度栗」を所有していることでも知られている。ちなみに、島家の菩提寺・高念寺と曾我量深の生家・円徳寺とは、地理的にも同じ村内であった。

ところで、昭和四十九（一九七四）年の棟方最晩年の作品に《羽海道棟方板画》全十三冊がある。一月から十二月までの月々の板画にはすべて松尾芭蕉の句が彫り込まれているのであるが、表紙の「開表の柵」だけは『奥の細道』とは関係のない《信濃川分水の柵》となっている〔図版4、リスト33〕。碑文の原稿を草したのは改修工事を指揮した技師・青山士あおやま（明治十一〇昭和三十八）である。パナマ運河開削にも携わった土木技師で、碑文の文章に日本語とエスペラント語が併記されているのは、クリスチャンであった青山の博愛精神が表出しているからである。記念碑のおもて面の碑文が「万象ニ天意ヲ覺ル者ハ幸ナリ FELICIA ESTAS TUJ KIUV VIDAS LA VON DE DIO EN NATURO」裏面の碑文が「人類ノ為メ 国ノ為メ POR HOMARO KAJ PATRUJO」である〔註17〕。なお、棟方は板画《開表の柵 信濃川分水の柵》の中で、実際の記念碑では裏面にあたる碑文の文言を「先」に、おもて面の碑文の文言を「後」に配置して描いている〔写真5〇9〕。《羽海道棟方板画》の《七月 新潟荒海の柵》については、〔図版5、リスト34〕を参照されたい。

棟方志功研究家の宇賀田達雄氏によれば、棟方は昭和六年の旅のとき、おそらく島丈夫から信濃川の悲惨な洪水の歴史とその治水工事のための苦勞を聞いたと思われる。そして昭和四十八（一九七三）年十月、棟方は羽海道の取材旅行で新潟から出雲崎へ出て、出雲崎から三条へ戻り、かつての島夫妻との旅の想い出の地を懐かしんだ。三条に戻る途中、棟方はわざわざ車を新信濃川放水路の東岸、分水第一公園に回してもらい、分水記念碑を訪ねた。そしてこの碑の碑文をもとに《羽海道棟方板画》の開表の柵（信濃川分水の柵）を作ったのである。棟方は碑に向かって「人ノ為メ、国ノ為メ」と大声で朗誦し、「イイネ、リツパナ言葉ダネ」とくり返し語り、しばし合掌し、そして大きく息を吸い込んだ——それは棟方がこの大精神をのみ込んで見えたように見えたと神崎正美は「随行記」の中に書いている

〔註18〕。しかし、すでにこの地には、棟方は昭和六年の島丈夫との最初の新潟旅行の際に訪れていて、大河津分水路の信濃川補修工事竣工記念碑も見ていたとする説もある。香川県立ミュージアム（当時）の窪美西嘉子氏は、「信濃川分水の柵」に刻まれた『人類ノ為メ 国ノ為メ 万象ニ天意ヲ覚ル者ハ幸ナリ』の句は、昭和六年に竣工した、信濃川下流域、大河津分水路の信濃川補修工事竣工記念碑の碑文で、まさにこの年、棟方は同地を訪れ、信濃川治水の偉業に感銘を受けていた。四十二年ぶりの再訪がなつての柵である」（傍線は小林）としている〔註19〕。初めて訪れたにせよ、四十二年ぶりに再訪したにせよ、棟方はこの「竣工記念碑」を一度は見ている。

今回、論文を執筆するにあたって、現地の分水記念公園に行ってみた。そこで驚いたのは、棟方が感銘を受け柵の題材にした碑文が刻まれている。「信濃川補修工事竣工記念碑」（昭和六年建立）が建つ土手のすぐ近くに、島丈夫の実家の菩提寺・高念寺の扁額を揮毫した「句佛上人」の句碑も建っていることである〔写真10〕。上人は布教の旅の途上、この地を訪れて句を詠んだ。句碑には上人の筆により、こう刻まれている。

信濃川乃分水路を見て

禹に勝る 業や心乃 花盛 句佛

〔註20〕

また、句碑の背面には、こう刻まれている。

昭和三年春建之

發起者	中蒲原郡白井村	田澤實入
建立者	同 郡 同 村	長井瀬平
	西蒲原郡味方村	笠原傳作
	同郡地藏堂町	山宮半四郎
賛助員	白根郷普通水利組合	野澤吉太郎
	常設委員	田中信太郎
		相澤成治
		眞柄國作
		遠藤傳平
		知野久太郎

柏崎

小林群鳳刻

実家の菩提寺の本山の法主の筆による句碑があることから、島が棟方をこの句碑のある記念公園に連れて行き、あわせて「竣工記念碑」も見せていたということは、可能性として十分にあるように思われる。この「句碑」と「竣工記念碑」のある公園は、土手から分水路の偉容を一望することが出来、その向こうには国上山、弥彦山を望むことの出来る「風光明媚」とも言える場所である。春は桜の名所にもなっている（この工事の関係者たちが植樹した）。ただし、「竣工記念碑」の建立者の一人に西蒲原郡味方村の笠原傳作なる人物が名を連ねているが、同じ味方村出身の島丈夫とこの人物との関係については、今のところ明らかになっていない。

三

昭和六年の旅に戻ろう。味方村での墓参のあと、島夫妻と棟方は島の妻ヤイの実家、加茂町の田下家に向かう。田下家は綿糸・砂糖を扱う商家であった〔註21〕。田下家には今でも、棟方から田下家の家族に送られた年賀状や絵手紙が残されている〔註22〕。また、島丈夫の妻ヤイの父で田下家の当主・田下三作の義理の娘ツヤの実家・亀田町の長谷川家は、代々醸造業を営む老舗で、新潟貯蓄銀行（当時）の代理店も兼務するような家柄であり、ツヤの兄で長谷川家の当主、長谷川松郎は亀田商工会議所の会頭をつとめたこともある名士であった〔註23〕。

棟方が滞在して下絵を描き、東京に戻ってから板（版）画作品にして国画会展で賞を受賞することになった長谷川邸の庭は、当時から有名だったらしく、郷土史料「稿本・亀田奇人談」には次のように述べられている。

〔長谷川家は〕代々酢、醤油を造り且つ販売するのが営業で北海道へ輸出する醤油といふと其名声は実に赫々たるものである〔中略〕氏〔長谷川松三郎〕の最も得意とした道楽はかの築庭術であつた。折ふし庭師の若水を雇入れて裏庭の修理に勉めてゐられたチャからして長谷川の庭といふと近郷近在に知られぬものは無い位である。〔註24〕

この旅を通して、島夫妻が支援する棟方を、加茂の田下家も亀田の長谷

川家も温かく支援することになる。棟方もこれらの人々の厚情に感謝して、後年、世界的な巨匠となった後も、しばしば新潟を訪れ、両家を訪ねるなどしている。以下は、棟方の主な本県来訪歴である〔註25〕。

昭和六(一九三一)年(二十八才) 十一月 西蒲原郡味方村(高念寺、

島丈夫の実家の菩提寺)、南蒲原郡加茂町(島夫人の実家・田下三宅宅)、中蒲原郡亀田町(田下良作夫人ツヤの実家・長谷川松郎宅)、北蒲原郡安田村(孝順寺、親鸞聖人の越後七不思議のひとつ「保田の三度栗」の所在地)、他(すなわち、西蒲原郡の分水記念公園にも足を延ばし、青山士の碑文が刻まれた記念碑や句佛上人の句碑なども見ているか)。また、この旅では《亀田、長谷川邸の裏庭》などの作品(板画)の下絵のほかに、おそらくお世話になった人たちへの贈答用と思われる色紙も何枚か描かれた。例えば《明神池にて(加茂山公園にて)》〔図版6、リスト1〕、《芸者図》〔リスト2〕などである〔註26〕。

昭和十(一九三五)年(三十二才) 六月 新潟県を旅行し、二十三日、佐渡へ渡る。

昭和十二(一九三七)年(三十四才) 加茂の田下家を訪ねた後、岩船郡山北町桑川の名勝「笹川流れ」に遊び、作品を制作する〔リスト16、17、18〕。

昭和十五(一九四〇)年(三十七才) 四月二十六日～二十九日、佐渡を旅行する。

昭和十七(一九四二)年(三十九才) 二月十六日、長岡市を旅行し、信濃川などを描く。

昭和十八(一九四三)年(四十才) 五月、佐渡旅行。

昭和二十(一九四五)年(四十二才) 夏、東蒲原郡津川町の正法寺(住職 乙川大愚)を訪問。

八月一日、長谷川家(亀田町)の親戚で三島郡出雲崎町の津山九二宅にて倭画《愛染明王図》〔リスト19〕を制作。
十一月 中蒲原郡亀田町、北蒲原郡中条町、新潟市を訪れる。福光町

(富山県西礪波郡、現・南砺市)の光徳寺住職・高坂貫昭宛ての棟方からの葉書(昭和二十年・冬)にこうある。「光徳寺」の題にて今民ゲイ館に上図の絵(光徳寺境内の図か——筆者註)陳列されてゐます。今吹雪中の新潟に参つて八日東京にかへります。オクサマ、マタミナミナサマニオヨロシク。ユキノトヤマ、フクミツホウリンジオモヒマス。〔註27〕。

昭和二十一(一九四六)年(四十三才) 四月、北蒲原郡中条町を訪ね、會津八一と会う。

五月十日～十二日、新潟市の佐久間書店で「棟方志功画業展」を會津八一の後援で開催する。

七月、柏崎市の桑山太市邸を訪ねる。
(十二月、三島郡出雲崎町の津山九二に《鐘溪頌》二冊を贈る。)

昭和二十二(一九四七)年(四十四才) 四月二十七日、新潟市の佐久間書店にて小品展を開催。

五月十六日、西頸城郡木浦村(現・糸魚川市)へ行き、夜は伊藤助右衛門邸に宿泊する〔註28〕。

十一月十二日、南魚沼郡大和町浦佐を訪れ、千手院(真言宗豊山派)にて芸談会を開催する。十三日、浦佐小学校にて「新潟県と私」と題する講演を行なう。午後、芸談会「日本の美」、夜は「藤や旅館」での宴の会に出席する。

十二月五日～十日、新潟市東堀五番地の北興民芸院にて「棟方志功新作展示会」を開催。このとき展覧会のポスターを自作する〔リスト22〕。

昭和二十三(一九四八)年(四十五才) 三月、新潟・佐渡旅行。相馬貞三宛て棟方の葉書(昭和二十三年三月九日)に「新潟に居ます。七日かへり八日にはお控への仕事仕ります。失礼してゐます。又々。」とある〔註29〕。なお、このとき《佐渡の石苔子の柵》〔リスト23〕が描かれている。

昭和二十四(一九四九)年(四十六才) 県立糸魚川高校(糸魚川市)で作品展を開催。

(この年、曾我量深の短冊を富山県福光の吉田龍象の道場「白道舎」で見えて感動し、同道場の襖四枚に《宿業者是本能 則感應道交》〔図

版7、リスト24」と大書する。

昭和二十五（一九五〇）年（四十七才） 九月三日、中頸城郡大潟町洪柿浜の専念寺・青木俊秀住職や光徳寺住職・高坂貫昭らと夷浜の米大舟の祭を見る。このときのことを青木俊秀は「棟方先生と米大舟」という文章の中で次のように書いている。「……………」九月三日、福光より棟方先生、高坂、笠原両氏も見えました。高田の斎藤陶斎（三郎）先生の窯へも案内しました。「夜風になって夷浜信光寺へむかいました。米大舟の踊りは、昔飢饉で米が無い時、坂田（酒田）の港から大きな舟に米を運んで来た時を偲び、又感謝の念を表し踊ったものです。ゆったりとした調子に太鼓が入ります。『青森のネブタの囃子と同じだよ』と、棟方先生はいわれました。が、この年は風が強く、途中で踊りは中止になりました。」「さて、その翌年の九月二日の宵、夷浜へ米大舟を踊りに出かけました。風はありましたが、昨年よりずっとずっと良く、境内には提灯がともされ、情緒豊かに踊りの輪が広がっており、元気の良い七十歳位のおばあさんが片肌抜いて真先に踊っています。これを棟方先生は板画にされました。『米大舟』という名の小品ですが、なかなかの上出来です。」「註30」。

昭和二十六（一九五二）年（四十八才） 三月、高田市立図書館で個展を開催する。写真家・濱谷浩宅に宿泊する。濱谷は「越中越後交遊記」と題する文章の中で次のように書いている。「……………」一九五一年三月、棟方志功個展が高田市立図書館で開催された。芸術に飢えていた引つ込み思案の城下町の皆の衆が、棟方芸術を目前にして感動した。」「高田での宿は拙宅で受持った。〔中略〕私の家には昔風の太福帳がある。写真を撮らせていただいた方々の署名帖みたいなことになっている。棟方さんはその帖に、

小矢部川 雪解け居るも 吾妹子の 矢羽根紫 袂香うも

と一気呵成に書かれ〔中略〕かき終えると、それぞれを近視し、そして眼を離し、津軽訛りで堂々朗々と短歌調に歌われ、そして、棟の字の大きな印をペタリと捺された。」「註31」。

高田（上越市）寺町の古刹、淨興寺も訪れる。

九月五日、柏崎市民会館にて個展を開催する。

昭和二十七（一九五二）年（四十九才） この年、新潟市の佐久間書店主のために《鯉図》〔リスト28〕を描く。

昭和三十六（一九六一）年（五十八才） この年、《佐渡地蔵の柵》〔リスト29、30〕を描く。

昭和三十九（一九六四）年（六十一才） この年《水の新潟の柵》〔リスト31、32〕を描く。

昭和四十八（一九七三）年（七十才） 十月、羽海道の取材旅行で新潟から出雲崎へ出て、出雲崎から三条に向かう途中、車を信濃川分水路の東岸の公園にまわしてもらい「補修工事竣工記念碑」（昭和六年建立）を訪ねる。この碑の碑文をもとに《羽海道棟方板画》の開表の柵《信濃川分水の柵》を描く。棟方は碑に向かって「人ノ為メ、国ノ為メ」と大声で朗誦し、「イイネ、リッパナ言葉ダネ」と繰り返して語り、しばし合掌し、そして大きく息を吸い込んだ、と伝えられている〔註32〕。

棟方はこの翌々年、昭和五十（一九七五）年に亡くなっている。

四

小矢部川 雪解け居るも 吾妹子の 矢羽根むらさき 袂香ふも

吾妹の 窓辺に描きし 桑山も 雪の田面も 雪解け居るも

雨に濡る 海棠手折り 活けくれし 淡き唇 吾妹子愛し

吾妹の 肌脛荒れむ 年経たむ 医王小矢部の 山川の辺に

灼く山に 泣く川の如 恋ひ愛なし 焼刃礪波 吾妹の肌

逆かたぎる 小矢部の青よ 胸炎えよ 赤くたかりて 吾妹恋ひ欲ゆ

〔註33〕

この六首の歌は棟方自身によって手直しされ、昭和二十二(一九四七)年一月発行の福光の短歌会誌『深林』第一輯に掲載された。この内の第一首「小矢部川 雪解け居るも 吾妹子の 矢羽根むらさき 袂香ふも」は、板画や倭画、書、陶器などにもなっていることから、棟方が特に好んだ歌であったことが分かる〔註34〕。

歌中の「小矢部川」は福光町内を流れる川である。また「吾妹子」は、棟方の愛妻チャコ夫人を指していると思われる。しかし、この歌が「福光に似た」どこかの風景を詠んだものであり、おそらくそれは「新潟」のどこかを詠んだものである、という説が仮にあったとしても、棟方と新潟の縁をこれまで見てきた私たちにとつて、その説はそれほど突飛なものではないように思われる。そして、その「新潟」のどこかとは、おそらく加茂町(昭和二十九年からは加茂市)であるように思われる。しかし、昭和二十一年の間に棟方が加茂町を訪れたという記録は今のところ見られないので、この「福光」加茂」説は仮説に留まらざるを得ないが、まだ無名時代の棟方が戦前の新潟を旅し、その後も多くの人々に出会いながら、板画家としての自己を形成してゆく過程の一端を本論で検証した〔註35〕。

なお、昭和六年の新潟県における美術界の動向としては、次の記録が残されている。大津津分水路の補修工事が完成した「昭和六年六月」に限ってみても、新潟県内の新興の洋画グループ「緑人社」や「野艸社」の展覧会記事を紙上各所に見出すことができる。前者は、当館で作品を多数所蔵している洋画家・笹岡了一(明治四十～昭和六十二(一九〇七～一九八七))が若い頃、洋画を志す同年代の若い仲間たちとともに新津町(当時)で結成した団体名であり、展覧会その他の「緑人社」関係の記事は『新潟新聞』昭和六年六月二十六日の第五面、同月二十七日の第二面、等に掲載されている。

また「野艸社」は、新潟市で長谷川秋一郎や白井徳重などの若い画家たちが結成した洋画グループの名称であるが、展覧会記事は同紙の六月二十一日紙面に掲載されている。なお、笹岡了一は昭和五年に新潟市で第一回展が開催された「新潟県展」(戦後の新潟県展〔新潟県美術展覧会〕と区別するために「旧県展」と関係者の間では呼んでいる。なお、戦前の新潟県展Ⅱ旧県展は、戦後の県展と違い「洋画」だけの展覧会であった)で特選一席を受賞して頭角を現し、翌年の昭和六年、第十三回帝展に初入選し、これを機に上京している。笹岡もまた「清水トンネル」を通じて「帝

都」東京に向かったことになる。こと昭和初期の新潟に限ってみても、国家レベルでのインフラ整備という一種の社会変革(それによってもたらされる国民の時間意識の変容)と美術の関係については、興味深いテーマであると思う。

〔註〕

〔1〕財団法人會津八一記念館編『平成十五年度特別展 棟方志功生誕一〇〇年記念 會津八一と棟方志功―ほとばしる個性―』新潟市會津八一記念館 平成十五年（以下、「會津」と略す）。

〔2〕雪梁舎美術館は、石井頼子『アート・ビギナーズ・コレクション』もっと知りたい 棟方志功 生涯と作品（東京美術 平成二十八年）においても「棟方志功作品を所蔵する主な美術館」として全国十一館のうちの二館として紹介されている（同書、八七頁）。同館発行図書のうち、本論文で参考文献とさせて頂いたのは、同館編『棟方志功作品展 図録』財団法人美術育成財団雪梁舎 平成十八年、および、公益財団法人 雪梁舎美術館編『雪梁舎設立20周年記念 捧賢コレクション』同館 平成二十五年（以下、前者を「雪梁舎『作品展』」と、後者を「雪梁舎『20周年』」と略す）。

〔3〕そもそも本論の着想は、筆者が平成三十年三月に北陸を旅し、富山県城端・福光（ともに現・南砺市）にも立ち寄り、同地の棟方志功記念館 愛染苑を訪ね、同館の大塚智子氏より「小矢部川の歌」が実は新潟のどこかの風景を詠んだものであることを伺ったことに遡る。私が同館を訪問したとき、ちょうど所蔵品の展示の中で「小矢部川のうた」の歌稿と他五首（すべて昭和二十二年作）が展示されていて、私が新潟から来た者であると知った大塚氏が、親切心からこのことを教えてくださったものと思われる。

〔4〕この点については、古厩忠夫『裏日本』岩波新書 平成九年、一三四頁「上越線全通の意味」を参照。また、新潟市出身の作家・坂口安吾は、小説『吹雪物語』（昭和十三年）の中で次のように書いている。「一九三〇年のことである。新潟も変わった。〔中略〕まづ第一に舗装道路。〔中略〕築港の完成。満州国との新航路開通といふこの市の特殊な事情もあるけれども、変わったのは、あながちこの市の話だけではないらしい。〔坂口安吾全集02』筑摩書房 平成十一年、一二四頁。また安吾は次のようにも書いている。「新潟港は信濃川の河口にあつた。大津分水工事や港内の浚渫・護岸・突堤等の諸工事がまだ行はれない明治初年の新潟港は、時節によつては深さわづかに二三尺の惨めさで、吃水四五尺の船が港外一里の沖に船繋をする状態だった。」（同書、二八七頁）。なお、このようなアジア史的視点からの安吾作品の読解については、川村湊『異郷の昭和文学―「満州」と近代日本―』岩波新書 平成二年、一〇〇～一〇八頁、等を参照。

〔5〕田村祥司「棟方志功と長谷川松郎」、亀田町史編さん室編『町のあゆみ』第二十一号 平成元年、一頁。

〔6〕棟方志功『板極道』（中公文庫）中央公論社 昭和五十一年、六一～六二頁（同書単行本の初版発行は昭和三十九年）。また、同時期に国画会で活躍していた新潟県出身の洋画家・佐藤哲三（明治四十三～昭和二十九（一九一〇～一九五四））のことを私たちは忘れることができない。

〔7〕石井、前掲『もっと知りたい 棟方志功 生涯と作品』九頁。

〔8〕島丈夫の妻ヤイと田下三作の続柄について、岡村浩・編著者代表「亀田郷ゆかりの文人集」（亀田郷ゆかりの文人展実行委員会 平成十七年）では「島氏の妻は加茂市の

の商家・田下三作の妹。この三作の妻が亀田町の長谷川松郎（醤油醸造業）の妹である」と述べ、ヤイが三作の「妹」であるとしているが（同書、三五九頁）、明治三十年生まれの島と、明治四年生まれの田下三作の二十六才という年齢差を考えると、本論では三作をヤイの「父」とした。小池邦夫・石井頼子「棟方志功の絵手紙」（二玄社 平成十八年）においても「田下三作は（……）島丈夫の妻ヤイの父」であるとされている（同書、一四二頁）。しかし「亀田郷ゆかりの文人集」の記述は、前掲、田村論文に拠っているものと思われるが、田村論文も「島の妻ヤイは、加茂市の田下三作（棉糸・砂糖商）の妹であり、三作の妻ツヤは亀田町の長谷川松郎（醤油醸造業）の妹である。」と述べている。

なお、田下家の親戚筋には、戦前の新潟県議会議長、加茂町長、帝国議会衆議院議員などを歴任した田下政治（明治十九～昭和二十八）がいて、戦後、彫刻家の金子直裕が田下政治氏の肖像彫刻《田下政治氏胸像》（昭和三十八年、ブロンズ）を作っている（加茂市役所蔵、写真は『金子直裕遺作集』金子田鶴子 平成十一年、七七頁、図版72。なお、同作品は現在、同市加茂山公園内に野外設置されている）。

〔9〕會津、前掲書、巻末年譜（八四～八五頁）を参照。

〔10〕棟方、前掲『板極道』五〇～五一頁。

また、棟方は島について次のようにも書いている。「さまざまにお世話になった島丈夫氏ご夫妻と知り合ったのも、この頃のことでした。島氏ご夫妻は、わたくしの絵と心を理解して下さり、目をかけて下さった新潟の方でした。」（棟方志功『わだばゴッホになる』日本経済新聞社 昭和五十年、五七～五八頁）。

前掲、田村論文では「島は、明治三十年に西蒲原郡味方村吉田新田の地主の家に生まれている。島の祖父は七穂村（後に味方村と合併）の村長をつとめ、父も島が生まれた頃は県議會議員になっている。」「父の事業失敗後、島は上京して本郷に薬屋を開業し、後年には日本有数の薬問屋『島丈夫商店』を経営している。」とある（同書、一頁）。

〔11〕前掲、東京国立近代美術館編『棟方志功展』、一九一頁（年譜 土屋悦郎編）。

〔12〕宇賀田達雄『祈りの人 棟方志功』筑摩書房 平成十一年、七四頁、および、前掲、雪梁舎『作品展』、一四六頁、他。

〔13〕前掲「亀田郷ゆかりの文人集」、三五九頁。この記述も前掲、田村論文に拠るものである。

〔14〕平成三十年九月二十四日のことである（写真1、2）。廣川和宏住職にお話を伺った。また、島がその下に眠る石碑には「願入弥陀界」と大書してあるが（写真3、4）、これは齋藤唯信（元治元～昭和三十二（一八六五～一九五七））による揮毫で、齋藤は新潟市関屋町（現・新潟市中央区）の念佛寺に生まれた真宗教学の碩学である。大谷大学教授（のち名誉教授）、文学博士のほか、真宗大谷派の最高学位「講師」にも選ばれた。なお、高念寺の概要については、味方村教育委員会内味方村史編さん委員会編『味方稽古艸子6 村のお寺とお宮』新潟県西蒲原郡味方村 昭和五十七年、一八～二五頁（五、吉江の高念寺のこと）ならびに味方村誌編纂委員会『味方村誌 通史編』味方村 平成十二年、二一五～二一六頁を参照。なお、前者は田子了祐『越後における真宗の展開と蒲原平野』（考古堂書店 平成二十五年）に再録されている（同

書、九二〜九九頁)。

〔15〕 田子、前掲書によれば、「味方村は『新潟県寺院名鑑』などにも他宗寺院が全く見当たらない真宗一色の土地柄」である(同書、七七頁)。

〔16〕 吉田龍象の道場「白道舎」襖書「宿業者是本能 則感應道交」である(図版7、リスト24)。飛鳥寛栗「棟方志功・越中ものがたり」(桂書房 平成二十五年)によれば「或る時、その白道舎で曾我量深の書『宿業者是本能則感應道交』の短冊を見て棟方は『宿業は本能か、感應道交。これじゃ、これじゃ』と大声で読みあげ、直ぐ襖を倒して筆がなかったので刷毛で書き上げ、『わ、後光が射いとる。後光が射いとる』と拜んでいたと、『自在人龍象』に出てい」とある(同書、七六頁)。また「曾我量深の教説に感動した棟方は、のちに曾我に頼んで一行ものの『観佛身者亦見佛心』を頂き、大切にしてい」たとある(同書同頁)。

〔17〕 青山士の経歴等については、高崎哲郎「評伝」技師 青山士 その精神の軌跡―万象二天意ヲ覚ル者ハ……」鹿島出版会 平成二十年、および、『写真集 青山士』後世への遺産「バナマ運河／荒川放水路／信濃川大河津分水路」山海堂 平成六年、等を参照。

〔18〕 宇賀田、前掲書、六七九〜六八〇頁。

〔19〕 棟方板画美術館監修、朝日新聞社企画事業本部編「棟方志功 祈りと旅」朝日新聞社 平成二十二〜二十三年、一四一頁(項目執筆・窪美西嘉子(香川県立ミュージアム))。

〔20〕 うにまさる「こうやこころの はなざかり」と読む。

禹は中国の伝説的偉人で、黄河の治水に努力すること十三年、その功績を讃えられ、夏(殷王朝の前の王朝)を作り、その皇帝となったと伝えられている。この句は、大河津分水路工までの約二百年にわたる故事を聞いた上人が、禹の事業に勝るとも劣らない大事業であり、その事業をなし遂げた人々の、治水への一途な気持ちに感動して詠んだものであるという。

〔21〕 田村、前掲論文、一頁。

〔22〕 小池・石井、前掲「棟方志功の絵手紙」には、田下家宛ての次のような年賀状や暑中見舞いが掲載されている。

・ 田下良作宛て年賀状(昭和七年)「松竹梅に鶴」の画に「迎昭和七年之吉春 東京市外野方町上沼袋二六三、松木内棟方志功」とある(同書、一一六頁および一四八頁)、
・ 田下良一宛て年賀状(昭和八年)「自画像」に「カモノヤママカイテレル、ワタクシデアリマス。」とある(同書、一一七頁および一四八頁)、
・ 田下三作・良作宛て年賀状(昭和十一年)「賀禧 昭和十一年元日 中野区大和町一八〇棟方志功」とある(同書、一一八頁および一四八頁)、
・ 田下三作・良作宛て「盛夏見舞」(昭和十二年)「真夏のお伺い申述べます。十二年盛夏／お母さまその後如何遊ばされ居りませうか。みなみなさまにもおよろしく。」とある(同書、一四頁および一四二頁)。

〔23〕 前掲、田村論文では「(長谷川邸の)庭園は専愛ショッピングセンター開店の際、用地として取り壊された。」とあり、写真集編集委員会編「写真は語る 亀田の百年」亀田町 平成二年、四六頁にも同ショッピングセンターの写真が「新潟貯蓄銀行亀田

代理店(明治三十五年)のあったところ」として掲載されているが、筆者が現地確認したところ、現在同地には社会福祉法人の高齢者福祉施設が建っている。〔写真11〕は明治三十五年頃の長谷川邸である(新潟日報事業社出版部編「写真集 ふるさとの百年(五泉・中蒲原・東蒲原)」昭和五十六年、一一二頁)。

〔24〕 前掲「亀田郷ゆかりの文人集」所収「稿本・亀田奇人談」(同書、三二九頁)。「亀田奇人談」とは「大倉息隠(漢学者)の談を鈴木長次(号・吐木)が筆録したもので、明治三十八年四月十二日の鈴木序文に成る。」原本は新潟市江南区郷土資料館蔵。以上、前掲「亀田郷ゆかりの文人集」三五四〜三五五頁による。

〔25〕 主に會津、前掲書、卷末年譜による。

〔26〕 なお、『明神池にて(加茂山公園にて)』は、筆者が撮影した同池の写真(平成三十年三月十二日撮影)「写真12」とも比較されたい。

〔27〕 小池・石井、前掲「棟方志功の絵手紙」、五二頁および一四四頁。

〔28〕 柳宗悦の「失はれんとする朝鮮建築の為に」(大正十一年八月、『東亜日報』に掲載)の原稿は、ここ伊藤邸で書かれた(三重県立美術館「平常の美・日常」の神秘 柳宗悦展」図録、平成九年、五二頁および二〇四頁)。伊藤助右衛門は富本憲吉などとも交流があり、民藝品や民藝作家の作品の収集家でもあった。なお、伊藤邸は平成三十年十月十九日、国の文化審議会重要文化財への指定が答申された(『新潟日報』同年十月二十日朝刊、三四面、および、文化庁ホームページ参照)。

〔29〕 小池・石井、前掲「棟方志功の絵手紙」二八頁および一四三頁。

〔30〕 「棟方志功全集 第十二巻 雑華の柵」講談社 昭和五十四年、八六頁。なお、雪梁舎美術館寄託の「米大舟頌の柵」(図版8、リスト25)はこのときの作品であるが、描かれている人物は若い女性である。

〔31〕 前掲、全集 第十二巻、八六〜八七頁。

また、濱谷は『學藝諸家』シリーズ(新潟県立近代美術館・万代島美術館、他所蔵)の「棟方志功 版画家」(一九五一年、モノクローム・プリント)の撮影の経緯についても触れていて、次のように書いている。「(……)九月二日、台風まがいの荒れる日だった。一同、荒れる日本海を見物しようということになって、浜柿浜の砂丘に立った。「海は荒海、向うに佐渡は見えず、雲が飛び草が風に靡いていた。雪国の秋は早い。越中も越後もやがてくる冬に身構えなければならぬ。日本海は海鳴りはつらく聞えてくる。そのきびしさをふつ飛ばすように、棟方さんはサツと砂丘を馳(駆)け廻った。」その時私は、棟方志功車馬天走りに、風神雷神の相を棟方さんの背に感じた。日本海、風、波、雪雷、志功、沖上げ、水雨、初雪、やがて根雪、降り積む雪、暗い冬。棟方さんは、自然人となって砂丘を駆け回った。」(同書、八七頁) なお、同頁には、疾走する棟方を撮影した濱谷の写真が「風神雷神」という題名で二カット掲載されている。

〔32〕 宇賀田、前掲書、六七九〜六八〇頁。

〔33〕 振り仮名は「棟方志功全集 第五巻 詩歌の柵(1)」講談社 昭和五十三年、一三八頁による。

〔34〕 板画《紫袂の柵》(図版9)、倭画《小矢部川早春》などである。

〔35〕 「小矢部川の歌」のメモ書きが、石崎氏宛てに旅先の棟方から送られた手紙(電報)

に書かれていたということを、愛染苑・大塚智子氏は、当時同館に勤務していた湯浅直之氏が生前の石崎氏から直接聞いたという談話の備忘録から識ったという。今回、大塚氏は、この論文を執筆する筆者のために、湯浅氏に当時のことを確認してくださったのだが、「小矢部川の歌」に詠われている場所がどこであるか特定できる情報は得られなかったとのことである。しかし、石崎氏宛てに棟方から送られた「歌」のメモ書きが書かれた電報は、棟方が新潟から福光に帰る途中、岩瀬（富山市）から送られた昭和二十一年秋のものであるとのことである。

これまで見てきたように、加茂町（市）へは、島丈夫の妻ヤイの実家・田下家があることから、昭和六年の最初の新潟への旅で訪れて以来何度も訪れている。また、田下家へ送った棟方の年賀はがきや季節のはがきが今でも残されていることはすでに見たとおりである。町の真ん中を加茂川という川が流れ、その向こうに美しい山並みを望む「北越の小京都」――小矢部川が流れ、遠くに美しい山並みを望む福光の風景によく似ているように思われる〔写真13、14〕。当時棟方は福光に疎開していたが、新潟市へ出る場合、東京方面からでなくとも鉄道では長岡駅経由の信越本線となるので、加茂駅は必ず通る駅である。それゆえ今のところ記録に見出せなくとも、途中下車していた可能性もなくはない（新潟から福光方面に戻る場合も同様である）。

けれども、加茂市（町）が「北越の小京都」と呼ばれることから分かるように、市（町）の真ん中を川が流れ、遠くに山並みが望める風景とは、きわめて「典型的」な「日本的（京都市）」で「美しい」風景――もちろん、その源流には中国的な「風水」思想があるのだからけれども――であるがゆえに、そのような風景を詠んだ棟方志功の慧眼がまさに普遍性を帯びたものであり、すでにこの次元において、「小矢部川の歌」は福光（富山）や加茂（新潟）といった個別の風景を離れて、ほかの棟方作品と同様に、世界に通用する普遍的価値を帯びたものとなっているように思われる。

（こばやし・かずよし 新潟市新津美術館 学芸員）

棟方志功 新潟関係作品リスト 〔略語一覽〕

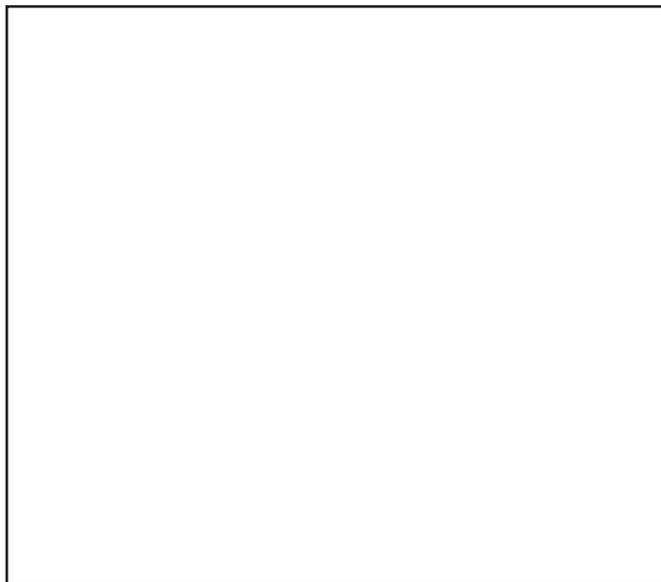
- ・〔全集4〕 『棟方志功全集 第四巻 花鳥の柵』 講談社 昭和五十三年
- ・〔全集5〕 『棟方志功全集 第五巻 詩歌の柵（1）』 講談社 昭和五十三年
- ・〔全集6〕 『棟方志功全集 第六巻 詩歌の柵（2）』 講談社 昭和五十四年
- ・〔全集11〕 『棟方志功全集 第十一巻 海道の柵』 講談社 昭和五十四年
- ・〔會津〕 註〔1〕に前掲
會津八一記念館『會津八一と棟方志功―ほとばしる個性―』（図録）平成十五年
- ・〔朝日〕 註〔19〕に前掲
棟方板画美術館監修『棟方志功 祈りと旅』朝日新聞社 平成二十二～二十三年
- ・〔飛鳥〕
飛鳥寛粟『棟方志功・越中ものがたり』桂書房 平成二十五年
- ・〔亀田〕 註〔8〕に前掲
岡村浩・編著者代表『亀田郷ゆかりの文人集』平成十七年
- ・〔雪梁舎「作品展」〕 註〔2〕に前掲
雪梁舎美術館編『棟方志功作品展』（図録）平成十八年
- ・〔雪梁舎「20周年」〕 註〔2〕に前掲
雪梁舎美術館編『捧賢―コレクション―』平成二十五年
- ・〔東近美〕
東京国立近代美術館編『棟方志功展』朝日新聞社 昭和六十年
- ・〔富山〕
尾山章・福井文夫監修『富山福光疎開時代 棟方志功作品集』東方出版 平成十六年
- ・〔福光〕
『「こころの軌跡―歓喜の人 棟方志功展」』（図録）南砺市立福光美術館 平成二十七年

棟方志功 新潟関係作品リスト (No. 1 ~ 36)

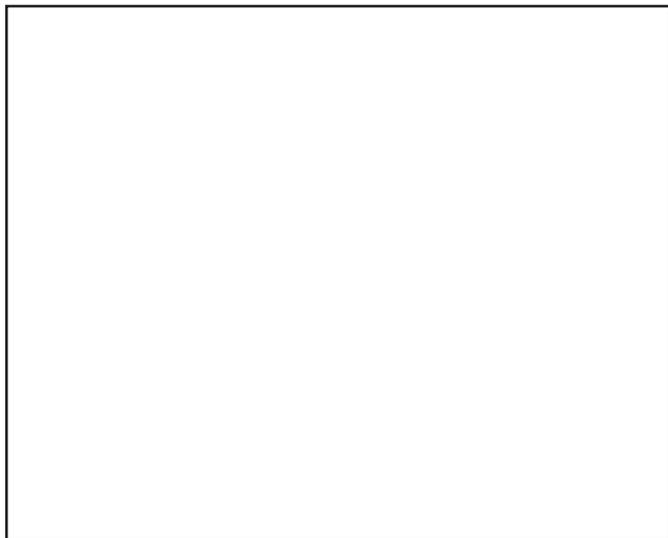
No.	作品名	制作年	技法/形状	寸法	所蔵	掲載	備考	図版番号
19	愛染明王図	昭和二十 (一九四五)	紙本墨画彩色 軸装	七八・六×六九・〇	雪梁舎美術館寄託	・會津、四八頁(図版39) ・雪梁舎『20周年』 一〇〇頁(図版94)	画面右に「於出雲崎アマセ浜 津山九二氏 エツゴ川 井妙高寺寶 愛染明王 時 昭和廿年八月一日棟方志功 拜伏礼寫成立」とある。亀田・長谷川家の親戚にあたる三島郡出雲崎町・津山家を訪ねた際に制作したもの。描かれた愛染明王は小千谷市川井・妙高寺(曹洞宗)の本尊で、鎌倉時代の作(国指定重要文化財)。(會津、七九頁)	
18	水辺図	昭和十一 (一九三七)	紙本彩色 額装	二七・〇×二四・〇	雪梁舎美術館寄託	・雪梁舎『作品展』 一〇二頁(図版74)	画面右に「十二年夏日志功 新潟所見、落款。	
17	桑川風景図(一)	昭和十一 (一九三七)	色紙	二七・〇×二三・五 (會津では、二七・一 ×二四・〇)	個人蔵	・全集11(図版6) ・會津、四七頁(図版37)	画面上部に「十二年夏日 志功於桑川栗生島」、左上に落款。(會津、七九頁)	
16	桑川風景図(二)	昭和十一 (一九三七)	色紙	二七・〇×二三・五 (會津では、二七・一 ×二四・〇)	個人蔵	・全集11(図版5) ・會津、四七頁(図版37)	画面右に「十二年夏日 志功写之、落款。 加茂の田下家を訪ねた後、岩船郡山北町桑川の笹川流 れに行き制作したものである。(會津、七九頁)	
15	(川辺風景)	昭和十一 (一九三七)	紙本彩色 軸装	二四×三三	個人蔵	・亀田	画面左下に「十二年春日 志功」、落款。(同上書、 二七頁)	
14~6	『ヴェニウス生誕別冊画譜』 1 表、2「飛行絨緞」、3 「ヴェニウス生誕」、4「乳房」、 5「或る数字」、6「かの女の 帝」、7「ダンデルの渚」、8 「湖死」、9 裏	昭和九 (一九三四)	凸版彩色 (手彩色)	(各)二一・〇× 一五・七	上越市立総合博 物館 他	・會津、三二~三四頁(図 版25) ・東近美、三〇~三一頁 (図版17-1~9)		
5	合浦、青森の公園	昭和七 (一九三二)	木版	一一・〇×二三・四	リュクサンブー ル美術館(パリ)		第7回国画会展	(図版3)
4	亀田、長谷川邸の裏庭	昭和七 (一九三二)	木版	一八・〇×二一・八	棟方志功記念館、 ボストン美術館	・全集4(図版18) ・朝日、一七頁(図版5)、 他	第7回国画会展(国画奨学賞受賞)	(図版2)
3	越後、加茂にての庭	昭和七 (一九三二)	木版	一六・八×二一・三	棟方志功記念館、 ボストン美術館	・全集4(図版17) ・朝日、一六頁(図版4)、 他	第7回国画会展	(図版1)
2	芸者図	昭和六 (一九三一)	色紙	一九・五×二三・二	ボストン美術館	・全集4(図版9)	第7回国画会展 全集に図版掲載されているが、国内での所蔵先は現在 不明。	(図版1)
1	明神池にて(加茂山公園にて)	昭和六 (一九三一)	絹本彩色 色紙	二四・五×二七・〇	個人蔵	・會津、四七頁(図版36) ・會津、四七頁(図版35)	画面右下に「昭和六年秋日 棟方志功写之」、落款。 (會津、七九頁)	(図版6)

		28	27	26	25	24	23	22	21	20
紫袂の柵	小矢部早春 《四季福光風景》 のうち	鯉図	會津八一の歌・あせたるを	會津八一の歌・毘沙門の	米大舟頌の柵	「宿業者是本能 即感應道交」	佐渡の石菩薩の柵	棟方志功展覧会 ポスター	十大弟子「普賢菩薩の柵」 《会津八一歌書賛》	十大弟子「文殊菩薩の柵」 《会津八一歌書賛》
昭和三十 (一九五五)	昭和二十八 (一九五三)	昭和二十七 (一九五二)	昭和二十六 (一九五一)	昭和二十六 (一九五一)	昭和二十五 〜二十六 (一九五〇 〜五)	昭和二十四 (一九四九)	昭和二十三 (一九四八)	昭和二十二 (一九四七)	昭和二十一 (一九四六) 昭和十四 (一九三九)	昭和二十一 (一九四六) 昭和十四 (一九三九)
木版彩色	紙本彩色 ／軸装	扁額	紙本墨書	紙本墨書	木版	墨書 ／襖四面	木版	板画	板画(木版) ／対聯	板画(木版) ／対聯
二六・六×三二・〇	六五・七×三四・六	三三・五×三三・七	一四〇・〇×三四・〇	一四〇・〇×三四・〇	二五・〇×一四・三	(各)一六六・五× 八三・五	一七・五×一〇・五	五一・〇×四四・〇	(各)九八・六× 四二・三	(各)九八・六× 四二・三
棟方志功記念館 愛染苑	南砺市立福光美 術館	個人蔵	躑躅飛山 光徳寺 (富山県南砺市福 光)	躑躅飛山 光徳寺 (富山県南砺市福 光)	雪梁舎美術館寄 託	白道舎(富山県 南砺市福光)	棟方志功記念館 愛染苑	個人蔵	個人蔵	個人蔵
・全集6(図版48)	・朝日、一三三頁(図版 60)	・會津、四八〜四九頁(図 版38)	・會津、一九頁(図版5)	・會津、一八頁(図版3)	・雪梁舎「作品展」五二 頁(図版28)	・福光(図版13)	・富山、六三頁	・會津、四七頁(図版34)	・會津、一七頁(図版1)	・會津、一六頁(図版1)
歌・自作／小矢部川雪解け居るも吾妹子の矢羽根紫袂 香ふも(全集6)		画面左から右へ「乾坤大寶之韻 昭和廿七年十月四日 吉祥刻、為佐久間書店大主人 志功拜寫、落款。 棟方は昭和二十一年、二十二年と二回、新潟市の佐久 間書店で個展を開催した。作品は店主のために得意の 鯉図を描いたもの。(會津、七九頁)	「安世多留於 人和善止字 頼婆果乃 佛之久知輪 母由遍幾毛之遠 雜華堂記」(あせたるを ひとは よしとふびんばくわの ほとけのくちは もゆべもき ものを)。棟方が會津の歌の中で最も愛唱した歌の一 首で、疎開先の福光時代にお世話になった光徳寺前住 職・高坂貫昭のために揮毫して贈ったものと思われ る。(會津、七六頁)	「毘沙門之 於母幾加々止爾 眞論比普壽 御仁乃毛 駄江毛 千年遍仁健 志功記」(びしゃもんのおも きかかるとに まろびふす おにもだえも ちとせへ にけむ)。會津八一の歌を棟方が揮毫した作品。(會 津、七六頁)			左側には白抜きで「愛染苑」の文字に続き「供祈拜板」 と彫られている。(富山、六三頁)	画面右下に大きく「棟方志功 展覧会」、画面下中央 に「会期 十二月五日至十日 会場 東堀五。かじ小 路下 北興民芸院」とある。北興民芸院の店主・村木 徳平は亀田町出身で會津八一とも親交があった。(會 津、七八〜七九頁)	画面右に「はつなつの かぜとなりぬと みほとけは をゆびのうれに」、画面左に「ほのしらすらし 丙 戌七月十日 秋艸道人會朔題舊作」。歌は大正十年代 詠、「南京新唱」―奈良博物館にて―所収。新潟市の 佐久間書店主所有の板画《十大弟子》二菩薩に會津 八一が自詠歌二首を書き入れた板画《双幅》二菩薩 の版木は空襲で焼失したため、戦前のものは数少なく、 その意味でも貴重な作品である。(會津、七六頁)	画面右に「はつなつの かぜのいかるがの おほてら に」、画面左に「みほとけたちの まちていまさむ 津齋主人」。歌は昭和十四年十月十五日詠「鹿鳴集」 「観仏三昧」―十五日三三子を伴ひて観仏の旅に東京 を出づ―所収。(會津、七六頁)
〔図版9〕					〔図版8〕	〔図版7〕				

36	35	34	33	32	31	30	29
蘭人犬曳図	菩提梅檀 双寶林	七月 新潟 荒海の柵 (《羽海道棟方板画》全13柵のうち)	開表 新潟 信濃川分水の柵 (《羽海道棟方板画》全13柵のうち)	水の新潟の柵	水の新潟の柵	佐渡地蔵の柵	佐渡地蔵の柵
制作年不詳	制作年不詳	昭和四十九 (一九七四)	昭和四十九 (一九七四)	昭和三十九 (一九六四)	昭和三十九 (一九六四)	昭和三十七 (一九六二)	昭和三十七 (一九六二)
紙本彩色	紙本彩色 ／軸装	木版墨摺彩色	木版墨摺	木版彩色	木版墨摺	木版墨摺	木版彩色
六八・〇×三五・三	四七×六九	三九・五×三四・〇	三五・四×三〇・二	二五・六×二四・四	二五・五×二四・〇	四〇・〇×二三・〇	四〇・〇×二三・〇
	個人蔵	株式会社安川電機	株式会社安川電機	雪梁舎美術館寄託			雪梁舎美術館寄託
・會津、四九頁 (図版40)	・亀田、二七頁	・全集11 (図版302) ・東近美、一八二、一八四頁 (図版69、72)	・全集11 (図版290) ・朝日、九五頁 (図版49)	・雪梁舎『作品展』五三頁 (図版29)	・全集11 (図版52)	・全集5 (図版116)	・雪梁舎『作品展』五二頁 (図版27) ・飛鳥、一〇〇頁
「いろはにはへとちりぬるをわかよたれそつねならむうろのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす蘭人犬引之図 棟方志功寫之」。(會津、七九頁)					東京オリンピックが開催された昭和三十九(一九六四)年、共同通信社企画、日本板画院制作で「新日本百景」という板画集が刊行された。棟方は松方三郎と共に同書の監修をし、この画を含む十点の板画を発表した。(全集11)	※全集の図版が115と116で入れ替わっていることに注意。	画中に「佐渡の地蔵 气(乞)へる門辺を 志功師の画廊ここそと 友は指さす 飛鳥一三美 女歌」(全集5)
		(図版5)	(図版4)				



〔図版2〕《亀田、長谷川邸の内園》昭和7（1932）年



〔図版1〕《越後、加茂にての庭》昭和7（1932）年



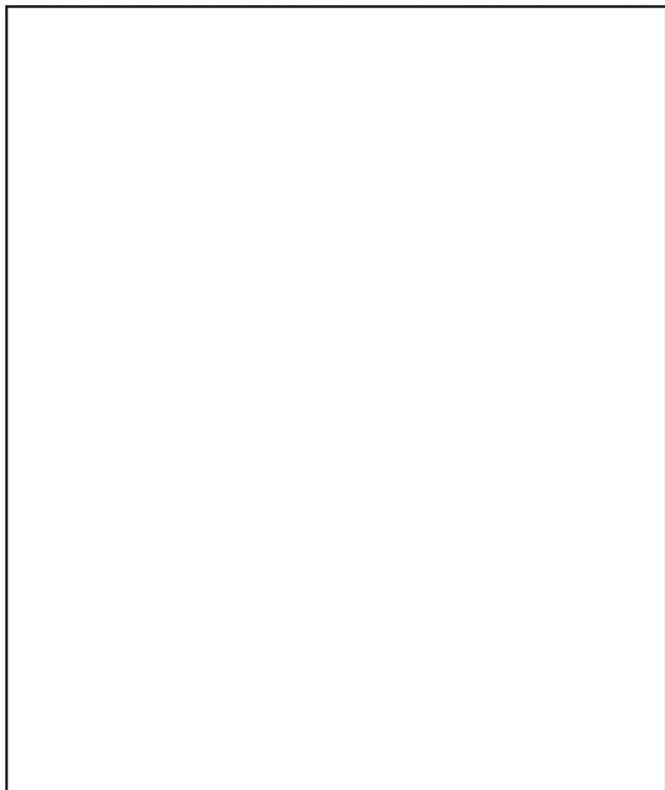
〔図版6〕《明神池にて（加茂山公園にて）》昭和6（1931）年



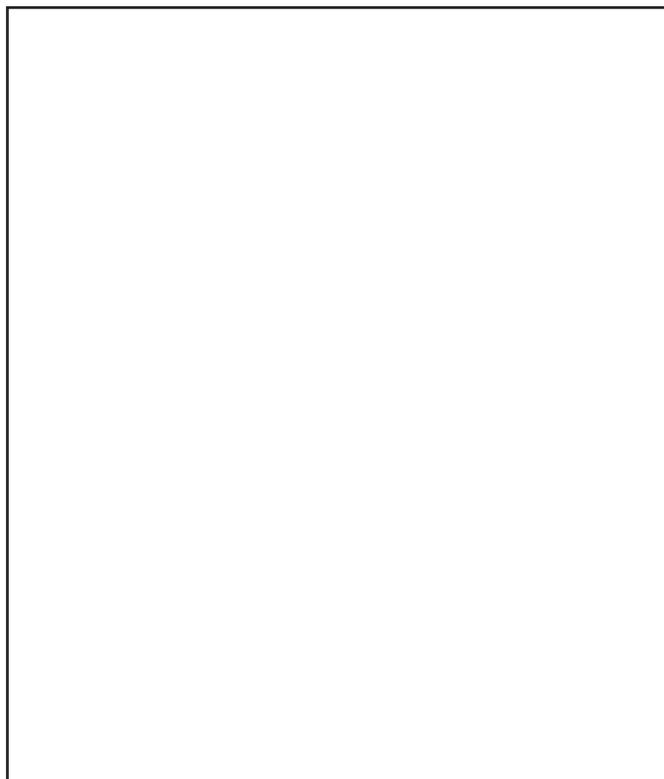
〔図版3〕《亀田、長谷川邸の裏庭》昭和7（1932）年



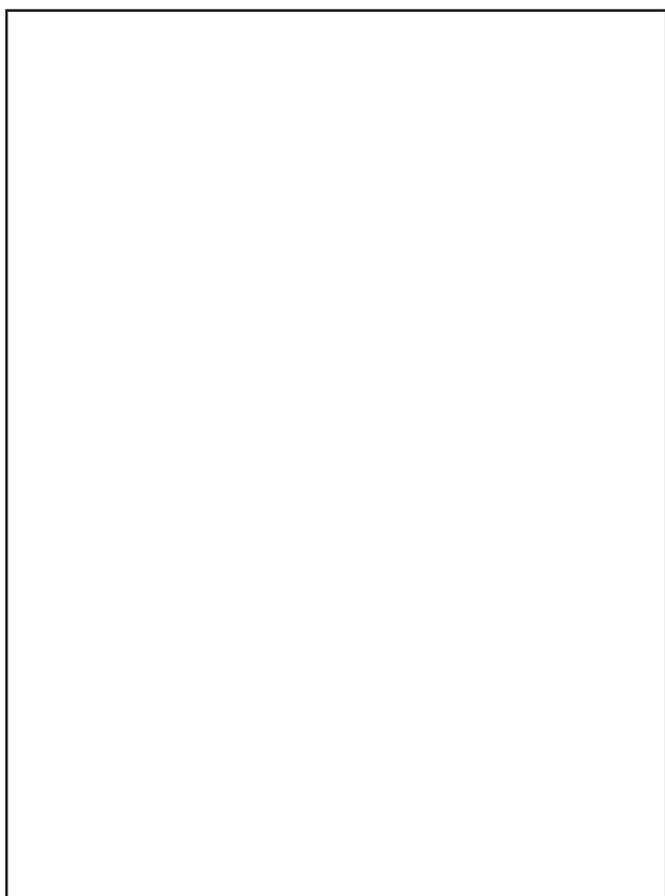
〔図版7〕《宿業者是本能 則感應道交》昭和24（1949）年



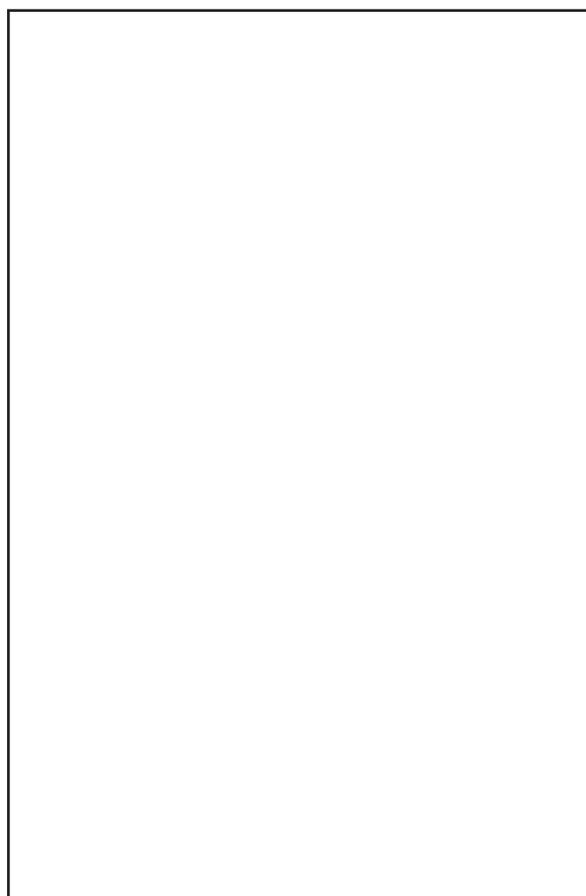
〔図版5〕《七月 新潟 荒海の柵》
（《羽海道棟方板画》全13柵のうち）
昭和49（1974）年



〔図版4〕《開表 新潟 信濃川分水の柵》
（《羽海道棟方板画》全13柵のうち）
昭和49（1974）年



〔図版9〕《紫袂の柵》昭和30（1955）年



〔図版8〕《米大舟嶺の柵》昭和25～26（1950～51）年



〔写真1〕高念寺 全景



〔写真3〕高念寺 本堂と石碑（右）



〔写真4〕高念寺 石碑



〔写真2〕高念寺 扁額



〔写真6〕信濃川補修工事竣工記念碑（裏）
向こう側が大河津分水路



〔写真5〕信濃川補修工事竣工記念碑（表）



〔写真8〕竣工記念碑 碑文（裏）



〔写真7〕竣工記念碑 碑文（表）



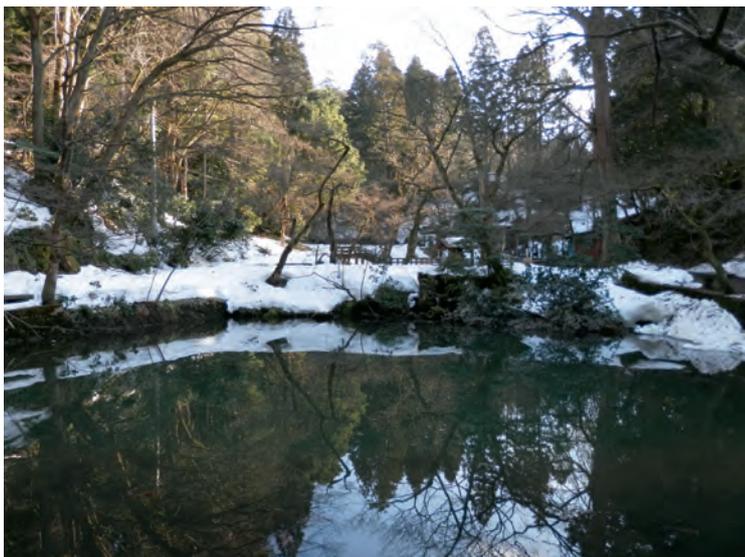
〔写真10〕句佛上人句碑



〔写真9〕信濃川補修工事竣工記念碑（側面）
左手の土手の向こうが大河津分水路。
写真中央に遠くに国上山が見える。



【写真11】長谷川邸（明治35年頃）
出典：新潟日報事業社出版部編『写真集 ふるさとの百年〈五泉・中蒲原・東蒲原〉』昭和56年、121頁



【写真12】加茂山公園（神池）



【写真14】加茂市眺望（2）



【写真13】加茂市眺望（1）

【写真11】以外は、すべて撮影：小林一吉

新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要 第6号(平成30年度)

Bulletin of Niigata City Art Museum & Niitsu Art Museum No.6

発行日/2019年3月25日

編集・発行/新潟市美術館

〒951-8556 新潟市中央区西大畑町5191-9

TEL:025-223-1622

FAX:025-228-3051

印刷/株式会社ウィザップ

ISSN 2187-6770